

朝10時に始まり、いま5時を過ぎてしまいました。ご参加いただきどうもありがとうございました。最後に私からご挨拶として一言申し上げたいと思います。

まずは、京大が挑戦という風を起こすという1つキーワードにまとめたいと思います。

きょうお聞きになられたように、京大は未踏ユニットというだれも到達していない研究をやっております。私たちの研究領域からひとつの例を紹介します。それは、私が医師国家試験を受けた1981年のことです、「マクロファージという細胞が、抗原提示細胞としてウイルスに感染したと記憶させる細胞である」という試験問題がありました。その出題者は当時まだ証明されていなかったマクロファージ抗原提示細胞説を試験に出してしまったのです。その後、マクロファージとは異なる樹状細胞が抗原提示細胞とわかりました。それを見つけたのはノーベル賞を受賞されたあるアメリカの先生ですが、そのチームに一番最初にやってきたのは、ここにおられます稲葉理事です。日本の女性研究者が樹状細胞を見つけたのです。私は、そういう細胞があるなんて医学部で聞いたこともなく、こんなすごい研究が京大から花開いたということを申し上げたいのです。実は毎年京大では、誰がノーベル賞をとるかなといううわさが飛び交います。だれもやったことがないという意味で、京大は未踏の研究をやっているつもりであります。

京大が挑戦する風を起こすということで、きょうのお話をまとめますと、原田先生の高い志を持って、高橋先生が言われた債務を減らす。そして、風を起こすのは竹広先生で、そしてそれを積み木のように債務を積み上げず、林先生の子どもさんは債務ではなくて積み木を積み上げるのです。債務を積み上げずに私たちの日本のために森先生のコンピュータ言語を進化させ、松田先生が紹介された夢の光ナノテクを開発して、最後にシバニア先生が言われたCO₂を減らしてまともな世界にするということが、今回の我々の目標です。われわれの使命は、日本そして世界をよくするという目標に向かって頑張っていくことです。

特に若い方、あるいは、もう私も60ですが、60以上の方でも、京大はいろんな意味で門戸を開いているつもりでございます。ぜひ、佐々木さんは勉強しなくていいと言われたのですが、私は勉強が好きですから、勉強していい国にしていきたいことを期して、閉会の辞としたいと思います。どうもありがとうございました。